

月曜寸言

私がモスクワに滞在している
あいだに、中国では「走資派」
批判が激発して、周恩来なき中
国の行方はきわめて流動的にな
ってきた。ソ連でも情勢を大い
に注目していたが、いわゆる上
海グループを中心とする文革派
が当面勢いを得るのではないか
という見方が強かった。私はモ
スクワからの帰途テヘランへま
わり、香港にも立ち寄ったが、
香港はさすがに中国情報「本
場」だけあって、はやくも華国
鋒をめぐる秘話や内幕物のパン
フレットが派手に出まわり、な
かには手早くも鄧小平を除外し
た新しい権力者像の小冊子など

もあつた。しかし、香港でも権
威筋は、まだまだ事態は流動的
で鄧小平らの「走資派」がこの
まま打倒されると結論づけるに
は時期尚早と見ているようだっ
た。

私はこれまで、毛沢東以後へ
の重大な転換期にある中国内政
にはある種の凝集力が働くので

情況がつづくであろうとも書い
た。しかも、やはり中国をとり
まく客観的な諸条件を考えれば
工業化の課題一つをとってみて
も文革派も実務派行政官僚や鄧
小平らのようなリアリスト覚官
僚の方にこそ本来、時の利があ
り、従つて、時の激動はあつて
も、少し長期的に見るなら、む
ちでの「走資派」批判は不必要

きの私の見聞からすれば、文革
よもう一度のエネルギーは、
中国の大衆のあいだにはもは
や存在していないように思う。
広州では江青批判の大字報もあ
つたとかで、まだまだ事態は流
動的だと思つたが、一つだけはっ
きりしていると思われることが
ある。それは周恩来の葬儀に鄧
小平が弔辭を讀んだことのもつ
意味であり、この事實は冠婚葬
祭にうるさい中国人社会で象徴
的な意味をもつたのではなから
うか。このままゆけば毛沢東の
死に際しても鄧小平が弔辭を讀
むのではないかと考えた文革
派の危機意識こそ今回の「走資
派」批判の起爆力であつたのか
もしれない。

「走資派」批判

中嶋信雄

はないかと思ひ、文革を脱文
革へもつていつた潮流とそれに
逆らう反潮流との角逐はつづく
だろうが、「批判批判」運動や
「水滸伝」批判の運動がいずれ
も不透明な輪郭のなかで終熄し
ていったように、当面、決定的
な結着はつかないまま流動的な

しる鄧小平の復権を必要とした
「深部の力」にこそ注目すべき
ではないかと考えてきた。私は
いま鄧小平が矢面に立たされて
いる時点でも、なお基本的には
自身はあるいは失墜するかもし
れないが、また一方、陰然たる
力をもっているがゆえに嵐のお
さまるまで耐えているのかもし
れない。昨冬中国を再訪したと

(東京外語大助教授)